

福岡高等・地方・家庭・簡易裁判所庁舎の紹介

本建物は、「次代を担う裁判所」として将来の組織改編や法改正等に組織区分を超えて十分に対応可能な、全国初となる「高等・地方・家庭・簡易裁判所合同庁舎」として建設された。

外観は、水平・垂直ラインによるシンメトリーな構成、高い環境性能を兼ね備えた端正な佇まいにより品位と風格を感じさせる庁舎として、公平で中立なイメージを想起させるデザインの建物になっている。玄関ホールは広く、明るく、光あふれる天

井高のある空間を確保し、来庁者を迎え入れる場を形成している。

環境・災害対策として、照明器具のLED化や太陽光発電設備を設置、電力・通信引込みの二線化によるリダンダンシーの確保を図っている。

平面計画では、動線の分離により、裁判所に求められるプライバシー・セキュリティの確保にも配慮している。



【施設概要】

建物名称：福岡高等・地方・家庭・簡易裁判所庁舎
所在地：福岡県福岡市中央区六本松4丁目2番4号
建築規模：地上12階・地下2階建て
敷地面積：20,000.01㎡
延床面積：56,878.16㎡
構造：S造（一部SRC造+RC造）

施設紹介

電気設備概要

- 受 変 電 設 備 受電方式：6,600V 2回線受電
受変電機器：屋内キュービクル（地下2階と塔屋階の電気室）
変圧器モールド・高効率型（トランス総容量4,300kVA）
- 自 家 発 電 設 備 非常用と保安用を兼ねたディーゼルエンジン発電機を地下2階発電機室に2台設置
容量500kVA 電圧6600V 軽油オイルタンク3,000L
- 照 明 設 備 館内必要箇所に人感センサー・昼光センサー・LED照明・非常照明・誘導灯を配置、
照明制御盤を地下2階中央監視室に設置
- 電力貯蔵設備 地下2階と塔屋階の電気室に、受変電・発電機設備制御、非常照明兼用の蓄電池設備
を設置
- 太 陽 光 発 電 屋上に太陽光パネル27kWを設置し、地下2階中央監視室に太陽光発電計測・表示
システムを設置
- 雷 保 護 設 備 構造体接地による外部雷保護設備。保護レベルⅢ
内部雷保護として分電盤・動力制御盤の一次側に低圧用（警報接点付）のSPDを
設置
- 通信・弱電設備 構内情報通信網設備（LAN設備）
構内交換設備（電話）
情報表示設備（出退・情報表示・電気時計）
拡声設備（拡声・法廷拡声・会議拡声・ページング）誘導支援設備（インターホン）
テレビ共同受信設備，入退室管理設備，監視カメラ設備，車路管制設備
自動火災報知設備



地下2階電気室内 受変電設備



地下2階発電機室内 自家発電設備

ケーブルラック耐震支持のさらなる強化 ～熊本地震を経験して～

株式会社 九電工
元田 裕斗

1. はじめに

2016年4月14日（前震）と16日（本震）に発生した熊本地震により様々な建物が被害を受けた。某工場も地震による被害を受けた建物である。某工場ではこれまで大規模増産工事が行われるたびに「防振・耐震委員会」という機関を設立し、建築設備耐震設計・施工指針の監修メンバーを「防振・耐震コンサルタント」として招いて防振・耐震対策に取り組んでいる。某工場は2001年に竣工してから現在まで、各地で発生した震災の教訓を生かして耐震施工要領を見直し、現場パトロールにより施工状況を確認し、品質を確保してきた。しかし、前震・本震と相次ぐ大規模地震によりケーブルラックの脱落が発生した。今回は被害状況から考察し、耐震施工の強化を行った施工要領を紹介する。

設置場所			耐震クラス【As種】対応
			電 気 配 線
上層階 屋上	工場棟	R階 6階	電気配線の支持間隔 約12m毎に1ヶ所 A種 又は B種 を設ける
	事務棟	R階 7階 6階	
	附属棟	R階 2階	
中間階	工場棟	5階 ～ 2階	電気配線の支持間隔 約12m毎に1ヶ所 B種 を設ける
	事務棟	5階 ～ 2階	
1 階 地 階	工場棟	1階	B種 を設ける
	事務棟	1階	
	附属棟	1階 地階	

表1 耐震施工基準【As種】

2. 耐震施工基準

熊本地震以前から某工場では耐震対策の目標として以下の3項目を掲げていた。

- ① 致命的な被害を防ぐ：人命保護、施設保全
- ② 設備機能の確保、二次災害の防止
- ③ 大災害後の生産活動に関する機能維持

この目標を達成するために「建築設備耐震設計・施工指針2005年度版」を基に独自の耐震施工基準を定め耐震対策に取り組んでいた。

某工場においては、上記の規定に「耐震支持部は全ての箇所、自重支持部分は2箇所に1箇所の割合で抜け止め金物を取り付けること」と付加規定を加え【As種】とし適用している。（表1）（図1）

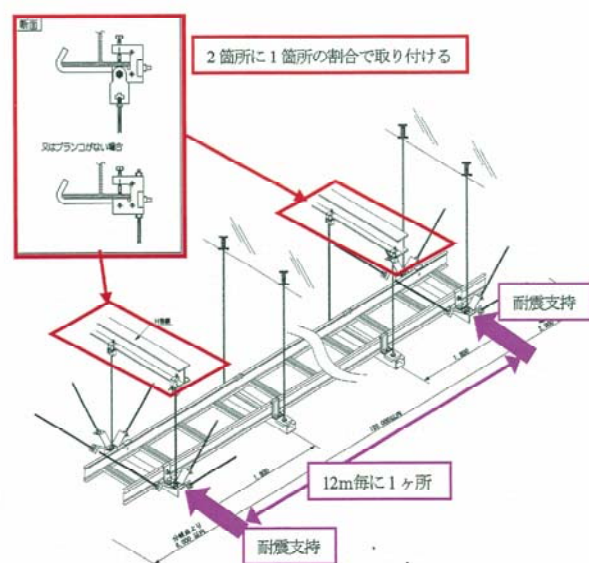


図1 耐震施工要領（支持間隔・付加規定）

3. 被害状況

前震発生後は、ケーブルラックが脱落するような大きな被害は発生しなかった。しかし本震発生後は、地階、1階、中間階のケーブルラックには大きな被害は見受けられなかったが、上層階のケーブルラックは脱落を起こし、多大な被害が発生した。共通していたのは吊り金物の変形であり、金物本体が通常では考えられない変形をしていた。(写真1)(写真2)

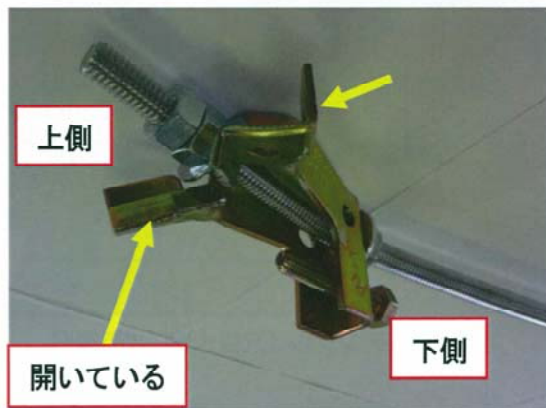


写真1 支持金物の変形



写真2 支持金物の変形

脱落したケーブルラックの被害状況を確認すると、B種耐震支持部は脱落せずに留まっているが、B種耐震支持（ブレース）に変形が見受けられ、その前後の自重支持材が脱落している状況であった。(写真3)(写真4)(写真5)



写真3 B種耐震支持の変形



写真4 B種耐震支持部前後の自重支持材の落下



写真5 B種耐震支持部前後の自重支持材の落下

4. 被害状況からの考察

某工場では「防振・耐震委員会」の中で施工要領の確認とパトロールを行い、精度の高い耐震施工を行っていたが、結果としてケーブルラックの脱落が発生した。一番被害を拡大させた要因としては、「自重支持金物」の許容荷重に対し余裕の無い荷重であったことが考えられる。許容荷重はあくまで静荷

技術レポート

重であり、地震の加速度が加わることにより変形をもたらしたと推測される。1個の支持金物が破壊されたことで、健全な自重支持金物に過剰に荷重がかかりドミノ倒しの様に次々と支持金物が破壊され、ケーブルラックの脱落へ繋がったと推測される。

また、自重支持金物への変位を抑制させるB種耐震支持では、今回の大規模地震では変形し耐震支持としての機能は果たせていなかったことが分かった。

また、憶測にはなるが前震によるダメージの影響で、本震によりケーブルラックが脱落に至った可能性も考えられる。

5. 復旧工事・さらなる強化へ向けて

工場の早急な再稼働を目指して、大きく3ステップに分けて復旧工事を実施した。

【ステップ1】

短期間（脱落した6部屋を1週間）で送電可能な状態に復旧することを目標に、大破したケーブルラックの撤去を行い、全ネジボルトとLアングルの鋼材にてケーブルの吊上げを行った。（写真6）

1週間でケーブル吊上げが完了し、送電を実施した。



写真6 Lアングル鋼材によるケーブル吊上げ

【ステップ2】

恒久的な耐震対策を考慮して復旧工事を行った。方針としては、ケーブルラック本体の完全な復旧は求めないが、震災前と同等・それ以上の強度を有した施工で復旧を行うことであった。震災復旧に特化した「防振・耐震委員会」が設置され、「防振・耐震コンサルタント」と協議を行い、【ステップ1】でケー

ブルを吊り上げたLアングルの鋼材に、Lアングル（穴空き）を繋ぎ合わせ、ターンバックルでブレースを組み込む事により強化を行った。また、付加規定である支持金物の抜け止めを耐震支持部、自重支持部の全てに取り付けることで強化を図った。

（写真7）（写真8）（図2）（図3）（図4）



写真7 Lアングル（穴空き）による復旧

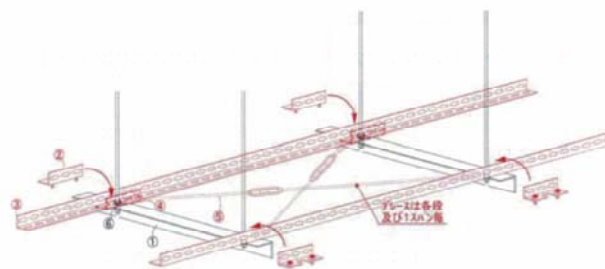


図2 Lアングルによる復旧 施工要領書（全体）

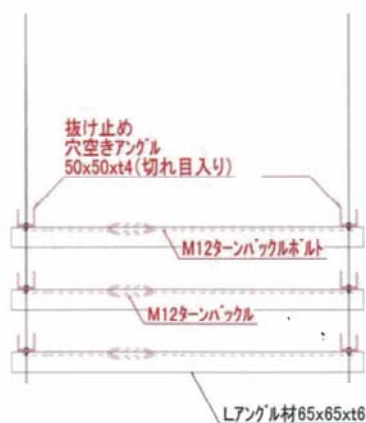


図3 Lアングルによる復旧 施工要領書（断面）

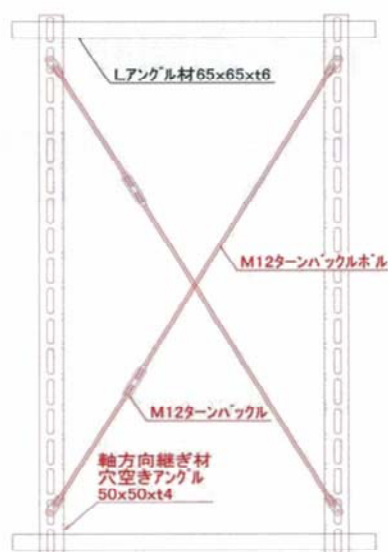


図4 Lアングルによる復旧 施工要領書（平面）

【ステップ3】

考察を踏まえて、「防振・耐震委員会」にて震災前の耐震施工基準に付加対策を加え、既設支持部分の全面見直しを行い、さらなる強化を行った。

耐震支持間隔：12m毎（従来通り）耐震支持の種類：原則A種耐震支持（B種施工不可）支持金物の抜け止め：全箇所取付け（幹線ラックのみ）A種耐震支持が既設物と干渉することにより、施工不可であれば、B種耐震支持+αにて対応を行う。

（図5）（図6）

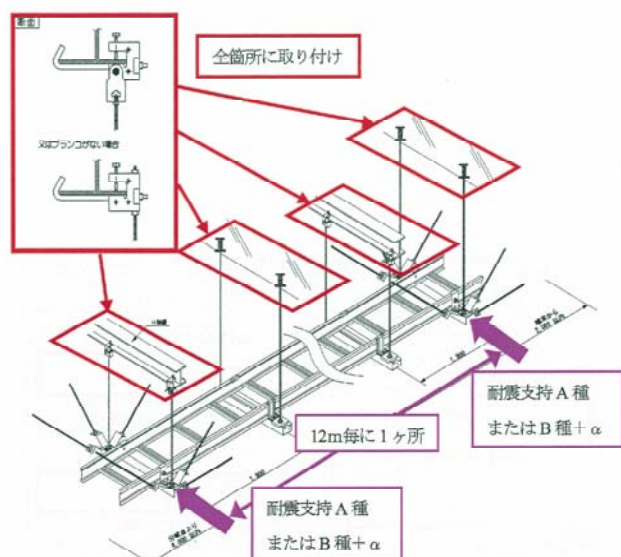


図6 B種耐震支持+α 施工要領書（断面）

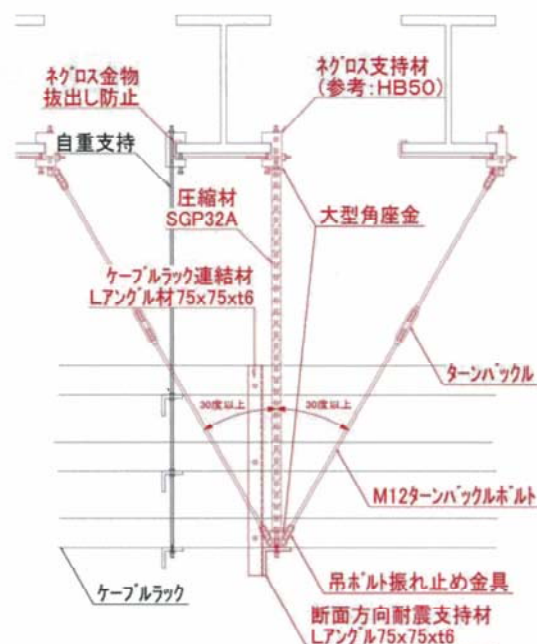


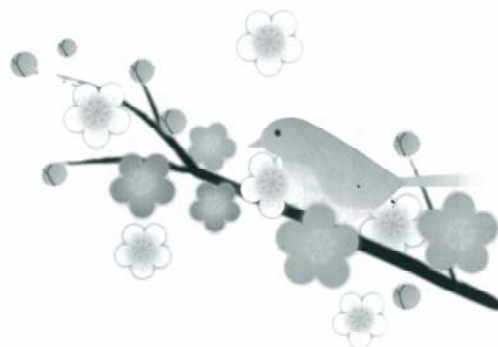
図6 B種耐震支持+α 施工要領書（断面）

6. おわりに

熊本地震によるケーブルラックの脱落を目の当たりにして、耐震施工が人命安全確保と事業・生産継続の両面において非常に重要であることを改めて認識した。

「防振・耐震委員会」で一般的な現場と比較して精度の高い施工を行ってきたつもりであったが、その認識も甘かったことを痛感した。復旧工事に関しては現場の状況に合わせた施工方法を検討することにより、固定観念に囚われずより良い施工を検討する思考や目線の大切さを知ることができた。

現在、各方面で防災・減災対策やBCPの取り組みが見直し・強化されている。今回紹介した施工要領がその一助としていただけたら幸いである。



太陽電池のEL測定用ドローンの開発

株式会社トーエネック 技術研究開発部
にしど ゆう き あおやま やすひろ
西戸 雄輝, 青山 泰宏

1. はじめに

2017年4月に固定価格買取制度が改正（改正FIT法）されたことにより，設備容量に関わらず太陽光発電設備のメンテナンスが義務付けられた。これによって，メンテナンスの必要性が高まっている。当社では，太陽光発電設備のメンテナンス技術の研究を進め，屋外においてEL測定法を行うオンサイトEL測定技術を確立した。ELとは，Electroluminescence（電界発光）の略である。

一方，近年では，小型無人航空機ドローンが，急速な技術進歩により様々な分野で活用され始めている。太陽光発電設備のメンテナンスでもドローンは可視・熱画像の測定に活用され，大規模な発電設備の点検効率化に寄与しつつある。

そこで当社では，オンサイトEL測定とドローンを組み合わせたEL測定用ドローンを開発したので概要を紹介する。

2. EL測定とは

太陽電池は，太陽の光エネルギーを吸収して電気エネルギーに変換する特性を持つPN接合半導体素子である。それとは逆に，太陽電池セルに電気エネルギーを印加すると，発光ダイオードと同様に，光エネルギーを放出する特性がある（図1）。この現象

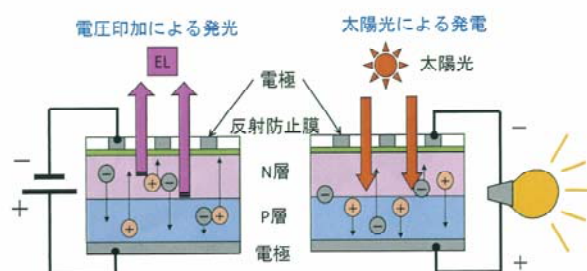


図1 太陽電池の発電と発光

をELと呼ぶ。ELをカメラで撮影することで画像化（図2）する手法をEL測定と呼ぶ。

太陽電池から得られるELの波長は太陽電池の種類によって異なり，結晶シリコン型は1,050nm，アモルファスシリコン型は900nm，ヘテロ接合型（HIT）は930nmの波長に発光ピークがある[1]。このようにELの波長は可視光領域（380～780nm）ではなく近赤外光領域であるため，目視でELを確認することはできない。また，このEL強度は太陽光の強度と比べて非常に低いため，日中屋外でのEL測定は難しい。そのため，太陽電池メーカーの出荷検査では，屋内の暗室など外乱光のない環境において，モジュール1枚ごとに測定する方法が利用されている。

3. オンサイトEL測定の課題

図3にこれまでに実用化したオンサイトEL測定のシステム構成を示す。接続箱の断路器から，ストリング（複数の太陽電池を直列接続した回路）単位で直流（DC）電源を接続し，太陽電池に直流電圧を印加する。測定用カメラには，EL測定専用のカメラを使用し，1ストリングを1回で撮影するため，太陽電池から数m以上離れた場所から撮影する。ノートPCには，制御用ソフトウェアがインストールされておりDC電源投入と測定用カメラのシャッ

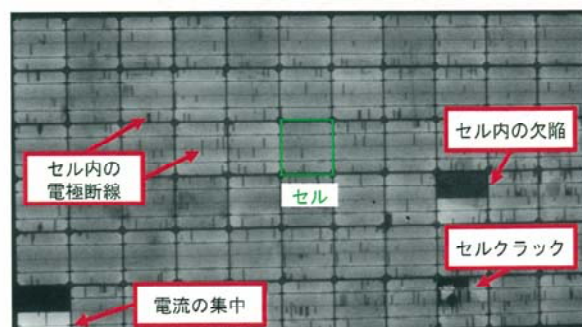


図2 太陽電池のEL画像例

ターを制御する。このオンサイトEL測定システムにおける課題を以下に示す。

(1) 測定時間

EL強度が非常に低いため、現場では三脚でEL測定用カメラを最適な位置に固定し、15～30秒程度露光させて撮影を行う必要がある。このためEL測定に長時間を要する。さらに、折半屋根設置等で多く見られる、ストリングの配置が同一方向の場合には、奥のモジュールは小さく表示され、ピントも合わせづらい。よって、カメラ手前の4枚程度のモジュールしか鮮明な画像を得ることができない（図4）。このように、撮影回数が増えてしまうことで、測定に時間を要する。

(2) 撮影距離

一般的な地上架台設置の発電設備では、アレイ間隔が前後2m程度空いているため、測定者が太陽電池の前面を移動することができ、EL測定を容易に行うことができる。一方、傾斜地や折板屋根に設置された発電設備では、敷地全面に太陽電池が設置されていることが多く、アレイ間隔が短いため、作業スペースが確保しづらいという問題がある（図5）。特に、撮影位置から距離の離れた場所にあるモジュールを撮影するために、撮影者がモジュールの上に乗って移動する場合もあり、太陽電池のセル割れを起こす原因にもなる。

これらの課題に対し、(1)についてはカメラの改良、(2)についてはカメラをドローンに搭載することで解決する方針として、開発を進めた。

4. カメラの改良

オンサイトEL測定に使用するカメラは、1枚のEL画像を撮影するために15～30秒のシャッタース

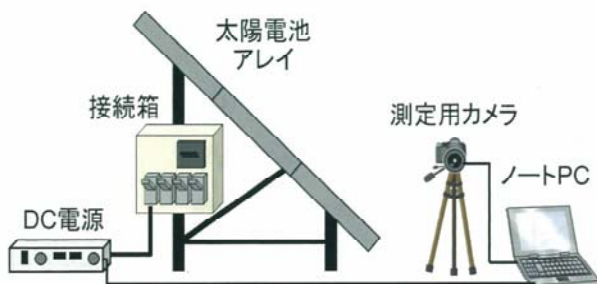


図3 オンサイトEL測定システムの構成

ピードとする必要があった。そのカメラをドローンに搭載しても、長時間カメラを固定し続けることができないため、画像にブレが生じてしまい鮮明なEL画像が得られない。

そこで、シャッタースピードを動画撮影レベル（1/30秒）にまで短縮したカメラを開発した。これにより、従来のカメラと比較して、高感度を実現した。

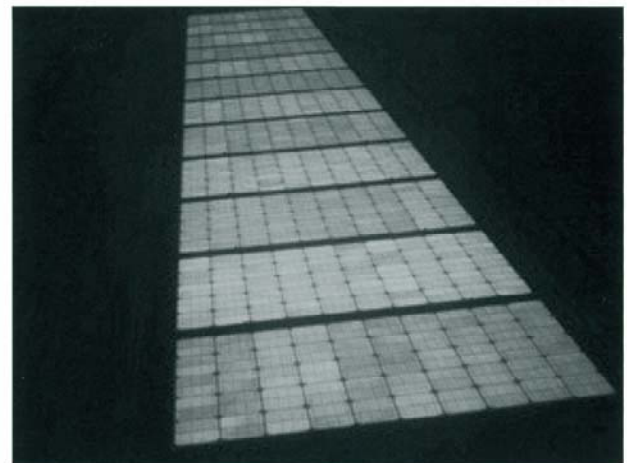


図4 折板屋根上の太陽電池（EL画像）



図5 折板屋根上の太陽電池（可視画像）



図6 ドローンEL測定システム外観

5. カメラのドローンへの搭載

開発したカメラをドローンに搭載し、EL測定の実験を実施した。ドローンにカメラを搭載するための「ジンバル」と呼ばれる治具は専用品が必要になるため、テストではドローンの下部にカメラを下向きに固定して撮影した。フィールドテストの結果から以下の課題を抽出した。

- ① カメラで撮影している映像を遠隔でリアルタイムに確認する方法が必要である。

- ② カメラの撮影方向を遠隔で操作できる方法が必要である。
- ③ 撮影したEL画像とモジュール位置を照合する方法が必要である。
- ④ 夜間飛行時にドローンの視認性を向上する方法が必要である。

これらの課題を解決するため、図6に示すドローンEL測定システムを構築した。測定は最小2名の作業員で実施可能である。1名はドローンの操縦を行い、もう1名はドローンに搭載したカメラの向きを操作しつつ、接続箱から測定対象のストリングへの電力供給操作を行う（図7）。また、EL測定時にドローンの飛行高度は、EL測定対象モジュールの解像度が低下しないように注意して、測定対象のモジュールがカメラフレームの中にすべて収まる高度（5～15m）で飛行させる。

前述の諸課題に対する解決策を以下に示す。

- ① カメラで撮影する映像は、リアルタイムに遠隔で確認できるように、ドローン側に映像伝送装置を搭載した。また、監視用ディスプレイ側に受信機を搭載した。
- ② カメラ専用のジンバルをドローンに搭載した。ジンバルはドローンの振動を吸収し、カメラの映像を安定化させる効果があるとともに、遠隔操作

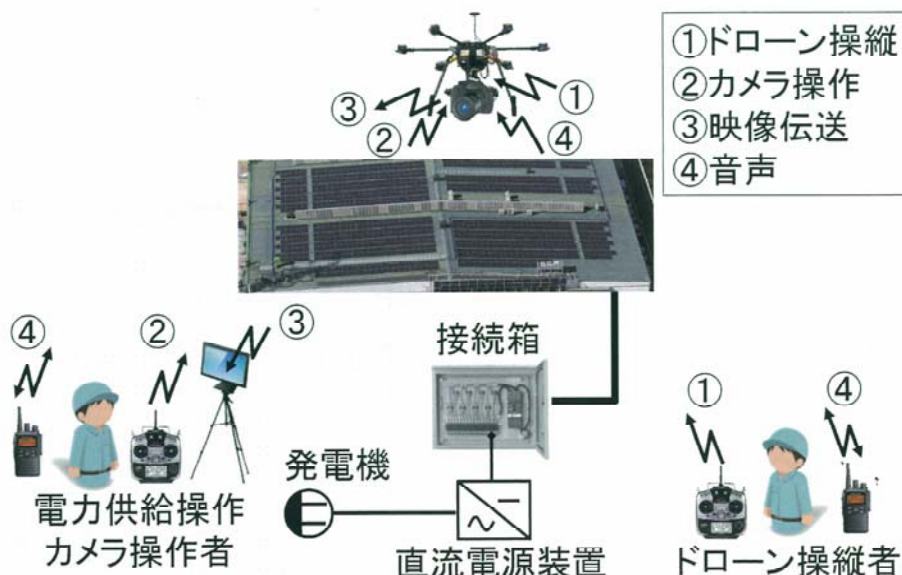


図7 ドローンEL測定システム概略図



図8 地上から撮影したEL測定画像

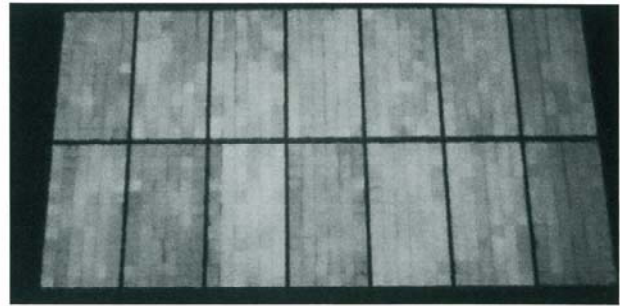


図9 ドローンで撮影したEL測定画像

でカメラの撮影位置を変更することができる。

- ③ 測定中にドローン操縦者と電力供給操作者で双方向の無線通話をし、その音声をEL測定の動画と同期して記録する。これにより、測定したEL画像とストリング番号との照合が可能となる。
- ④ 夜間の視認性向上のため、ドローンにはLED灯火を増設した。ドローンの前後でLEDを色分けすることで、遠方からでも前後が分かりやすく、操作性が向上し、飛行安全性が高まる。

6. フィールドテスト

開発したドローンEL測定システムによるフィールドテストを当社所有の太陽光発電設備で実施した。今回のフィールドテストでは、同じストリングに対し、地上に設置したカメラによるEL測定とドローンによるEL測定を行い、得られた両画像を比較した。

地上から撮影したEL測定画像（図8）は、画像奥のモジュールが小さく表示されており画像から各セルの明暗を確認することが難しい。一方、ドローンから撮影したEL測定画像（図9）は、全てのモジュールが同じ大きさに画像上に表示されており、各モジュールの状態を明確に確認することができる。このように、地上からELを撮影する際に撮影位置から距離の離れたモジュールが見えづらくなるという課題を解決できた。本手法は傾斜地や折板屋根での点検に有効な手法である。

もう一つの課題である測定時間に対しては、ドローンの準備やバッテリー交換等の時間を含めても、地上からのEL測定と比較して10%程度の測定時間を短縮することができた。前述の一度に撮影できるモジュールが増えたことと、撮影の度に人が移動しなくても良くなったことが要因である。フィールドテストの結果、1MWの太陽光発電所のすべてのモジュールのEL測定を9時間程度で完了できた。

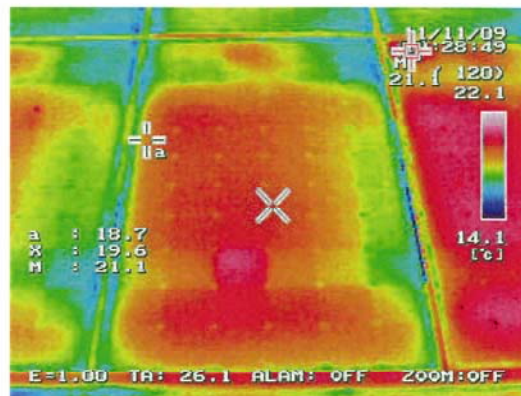
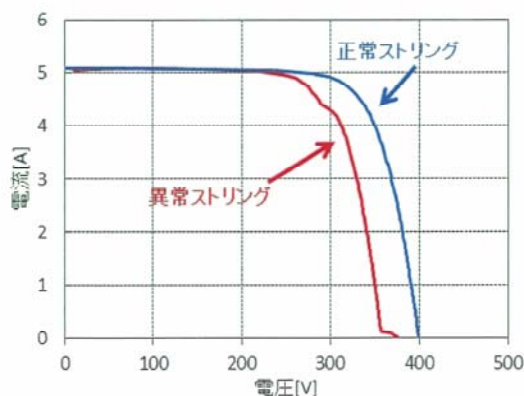


図10 I-V特性測定(左)と熱画像測定(右)

7. 他の点検手法との比較

場において用いられる太陽電池の点検手法には、I-V特性測定や熱画像測定（図10）がある。表1に点検手法と検出可能な異常を示す。I-V特性は通常、ストリング単位で測定するため、異常の発生しているモジュールの特定作業が別途必要である。また、熱画像測定では発熱を伴わない異常の発見が難しい。I-V特性測定や熱画像測定では異常を電気特性や熱特性として間接的に検出する。一方、EL測定には、目視では確認できないセルの割れや、電極の断線といった発電性能に直接影響を及

ぼす全ての異常を検出できるメリットがある。

また、EL測定では、発電量が大きく減少する「Potential Induced Degradation（以下、PID）現象」の進行も容易に見つけることが可能である。PID現象は近年、発生報告が増えており、太陽電池の劣化現象として関心が高まっている。当該異常が発生している場合、発電所全体のモジュールで発生している可能性があり、時間経過と共に症状が進行するため、早期検出が求められる。PID現象が発生している位置特定までできることも、EL測定の大きなメリットである。

診断手法	発生リスク	EL測定	熱画像測定	I-Vカーブ測定
測定条件	—	夜間・停止時に電流を流す	昼間・運転時	昼間・停止時
売電への影響	—	なし	なし	あり
セルクラック・欠陥	発火・漏電の危険	◎	△ (発熱する場合)	×
ガラス割れ	ガラス飛散・漏電の危険	◎	◎	△ (度合による)
PID現象	発電量減少	◎	×	○
BPD※短絡故障	発電量減少・発熱	◎	◎	○

※バイパスダイオード

表1 各点検手法と検出可能な異常

8. おわりに

これまでに本研究では、太陽電池メーカーが出荷時にのみ工場の暗室で行っていたEL測定を、実際の屋外現場でも適用できる「オンサイトEL測定」として開発した。本稿では、オンサイトEL測定の更なる効率化を目指し、他社に先駆けて実現した「ド

ローンEL測定システム」の開発について報告した。

今後、測定サービスとしての受注や、さらなる高性能化を目指し、安全な太陽光発電設備の運用に寄与できるよう、さらなる改良を進める予定である。

“電気にかかわる仕事に就きたい” 思いで入社。

株式会社 秀電社 営業部
さわべ さやか
澤邊 瑳さん



プロフィール

福岡大学経済学部卒業後、平成30年秀電社に入社。

Q.電気工事会社に入社しようと思ったきっかけは？

大学4年次に就職活動をする際、どのような仕事に就くとやりがいを感じられるか考えたときに地元である福岡の暮らしを支え、発展させていくようなインフラ業に関わることだと思いました。インフラ業の中でも父が電気に関する仕事に就いていたため、電気に関わる仕事に就きたいと思い、縁があつて秀電社に入社しました。

Q.今、どんな仕事をしていますか？

また、仕事の魅力・やりがいは何ですか？

機器売りの営業をしています。取り扱っている機器は主にマンホールポンプです。まだ入社して1年目ですが、見積書作成や提出、入札対応、契約業務等様々なことを経験させて頂きました。営業をしていく上でマンホールポンプとはどのような役目があるのかということから勉強し始めました。当社の事業はマンホールポンプや水処理場等の水処理プラントに関わる工事を行っており、私たちが使った生活水が循環してもとのきれいな水になるまでの過程に携わっていると実感し、仕事のやりがいに繋がっています。また、経済学部出身の私は電気に関する知識はほとんどないため、先輩たちに教えてもらいながら第二種電気工事士の取得を目標に勉強中です。



Q.これまでの仕事の中で印象に残っているものは？

入札対応をし、初めて受注した際には上司や先輩からはめて頂き、とても嬉しく思いました。その案件の工事はまだ終わっていない為、竣工し現場を見に行った際にきっと忘れられない経験になると思います。今後も様々なことに積極的に取り組み、多くの経験をしたいと思っています。

Q.最後に同業で働いている女性のみなさんへのメッセージもしくは建設業界を目指そうとしている若い世代の女性にメッセージをお願いします。

この業界で女性の営業職の方は少ないと聞いてはいましたが、入社して改めて実感しました。その少ない業界だからこそ女性にしかできないこともあるのではないのかと思い模索中です。結婚、出産後も働く方が多い今の世の中で、今後女性の営業マンが増え、仕事の情報交換や意見交換だけでなく様々な苦労話や経験談も話す機会ができるといいなと思っています。

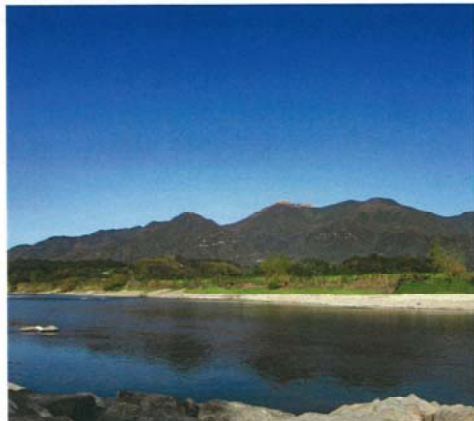
■上司からひと言

まだ、入社して半年余りですが驚いています。週に数回、営業廻りに同行しますが、営業先でも元気に笑顔で挨拶が出来るので、自然とお客様から声をかけて頂いています。文系出身の彼女ですが、お客様に満足して当社の商品を使って頂きたいと電気設備や機械設備に関する知識を日々、習得しています。将来が楽しみです。



福智町

福智町は、福岡県の中部から北東よりに位置し、直方市、田川市、飯塚市などと隣接しています。福岡・北九州市の両百万都市の中心からそれぞれ約45km、約35kmの距離にあります。人口は約2万3千人、面積は42.06平方km。町の中央部で彦山川と中元寺川が合流し、貫流しています。標高901mの秀麗な福智山がそびえ、その山頂一帯は北九州国定公園に指定されています。高さ25mの滝が小渓谷をなす上野峡の近くには400年以上の伝統を誇る国指定伝統的工芸品「上野焼(あがのやき)」の窯元が点在。また、「かもめの水兵さん」「うれしいなひなまつり」などでお馴染みの、数多くの童謡を作曲した河村光陽氏の生誕地でもあります。福智町は、豊かな自然と文化に彩られながら、地域ブランド化や観光・教育をはじめとする人の活力を生かしたまちづくりを展開しています。



町花【フジ】



樹齢500年以上の「迎接(こうじょう)の藤(県指定天然記念物)」は、所在する定禅寺が「藤寺」と呼ばれるほど、広く有名です。ツルがよく伸びる、樹齢が長い、住民のなじみが深い、などの理由から町花としています。

町木【エドヒガン】



推定樹齢600年以上で県内最大最古の「虎尾桜(町指定天然記念物)」に代表され、町内に40本程確認されているエドヒガンは、長寿のサクラで町特有の貴重品種。サクラを含めて町木としています。

町鳥【ウグイス】



おもむきある鳴き声で季節の到来を告げ、春告鳥(はるつぐとり)とも呼ばれるウグイス。町内の各地でみられ、通年同じ地域に生息する留鳥(りゅうちょう)という親近感から町鳥としています。

福智町の地域資源

■福智山

標高901mの福智山は、町名の由来にもなった郷土を象徴する名山です。「白糸の滝」や「虎尾桜」など見所も豊富。バリエーション豊かな登山コースがあり、初心者から上級者まで楽しめる人気の山です。山頂は360度見渡す限りの大パノラマが広がり、東は周防灘、西は玄界灘まで見渡すことができます。かつては修験の山で、山頂で最澄や空海も渡航の安全祈願をしたと伝えられています。



■上野焼

現在、福智町内に20窯元が点在する「上野焼」は、千利休の高弟で当時屈指の大名茶人・豊前小倉藩主の細川忠興公が、李朝陶工の尊楷(そんかい)を上野の地に招いて開窯した国焼茶陶。御用窯かつ藩窯としての歴史を重ね、400年以上の伝統が受け継がれている国指定の伝統的工芸品です。その特徴は、緑青(ろくしょう)をはじめとする多種多様な色と肌。長い伝統から生まれた多彩な技法により、各窯元が創意工夫を凝らし、陶技を磨き続けています。



■福智町図書館・歴史資料館「ふくちのち」

赤池支所（旧赤池町役場）をリノベーションして平成29年3月にオープンした福智町初の図書館・歴史資料館。多機能型複合施設で地域の拠点を担う施設です。

本を読むだけでなく、3Dプリンターなどの最先端工作機器を体験できる「ものづくりラボ」や地元食材にこだわったベーカリーカフェ「としよパン」、小さなお子様も安心の「こどもひろば」、上映会も楽しめる「サイレントルーム」、福智の風土を体感する「クッキングラボ」など、ワクワクするような機能を多く備えています。



■福智スイーツ大茶会

50店を超える福岡県内の有名スイーツ店が一堂に会し、例年、県内外から3万人以上が訪れる九州最大規模のスイーツイベント「福智スイーツ大茶会」。地元で育まれた「食」、国指定伝統的工芸品・上野焼の「器」、童謡作曲家・河村光陽の生誕地として醸成された「音楽」という福岡県福智町ならではの魅力を融合させた地域ブランド化を担うシンボルイベントです。



■金田・神崎山笠競演会

例年、秋の夜を彩る山笠競演会。会場は10mを超える壮麗な山笠がまとった光と引き手たちの熱気に包まれ、光芒を放つ山笠が迫力ある「練り回し」を披露します。会場に鳴り響く最速の囃子の旋律が山笠を鼓舞し、「オーラーヤッサ」の掛け声とともに、観る人を圧倒します。



■興国寺

足利尊氏が国家安泰のために建てた安国寺第一位の寺です。無隠元晦禅師の座像や興国寺文書、観音堂など数々の寺宝や県指定文化財があります。また足利尊氏ゆかりの寺であり、尊氏が身をひそめたといわれる「隠れ穴」や、枝を切り落とし、土中にさかさまにさして戦運を占ったという「墨染桜」、「馬蹄石」などが伝えられています。



■協奏の庭

上野の里ふれあい交流会館敷地内にある「協奏の庭」は「河村光陽先生記念碑」と光陽作曲の代表作「うれしいひなまつり」をモチーフとしたモニュメントを主に構成。「日本の伝統美」と「美しい日本旋律」の「協奏」をテーマに創作されています。あらゆる部分が上野焼を駆使して表現され、童謡のなつかしい旋律が醸し出す「やさしさ」と手づくりの伝統的工芸品から伝わる「ぬくもり」が融合し、上野の風土と調和した空間となっています。



■平成筑豊鉄道

120年以上前から炭都筑豊と地域を支え続けてきたマイレール「平成筑豊鉄道」。福智町に本社があり、地域の鉄道ならではの車両運転体験や企画列車も人気です。今春から「ななつ星」など多くの観光列車を手掛けた水戸岡鋭治氏デザインによる観光レストラン列車「ことこと列車」を運行予定です。

